

坂井市旧三国町における三国祭の際の空地活用可能性に関する社会実験 観光まちづくりにおける三国祭の活用に関する考察 その3

三国 三国祭 観光まちづくり
歴史的町並み 空間利用 地方都市

正会員○ 松田 季詩子* 同 神谷 安里沙*
同 中村 慎吾* 同 田中 雄大*
同 矢吹 剣一** 同 中島 伸***
同 西村 幸夫****

1. 研究の背景と目的

福井県坂井市にある旧三国町は、九頭竜川の河口に位置する北前船の寄港地として栄えた湊町である。近年は郊外や都会への人口流出や高齢化に伴い空き家、空地が増加しているが、伝統的な建築様式の「かぐら建て」等を生かした観光まちづくりへの取り組みも日常あるいはイベントの面から進んでいる。

下新公園（以下、愛称マチノニワ）は、空き町家等のリノベーションが進み、観光まちづくりが進展しているきたまえ通りに面しており、町並み保全等の観点から元々使われていなかった公園を、2016年に改修した。三国では伝統的に九頭竜川に平行した何本かの道に面している細長い町家が形づくられてきたが、マチノニワの形状も町家の空間構造を色濃く残した形となっている。



図1 マチノニワの形状と入口付近

また、マチノニワは三国駅から徒歩5分ほどであるとともに、三国祭の山車が前面を通過する立地にある。地元の人・観光客が多く集まる三国祭でイベントスペースとして実験的に活用した。

本稿では、来場者調査によって三国祭時のマチノニワにおける来場者の反応や利用実態を把握することで、町家的な形態を残した空地において、イベント開催時・通常時の双方に対し、活用の知見や課題を得ることを目的とする。

2. 対象空間と調査概要

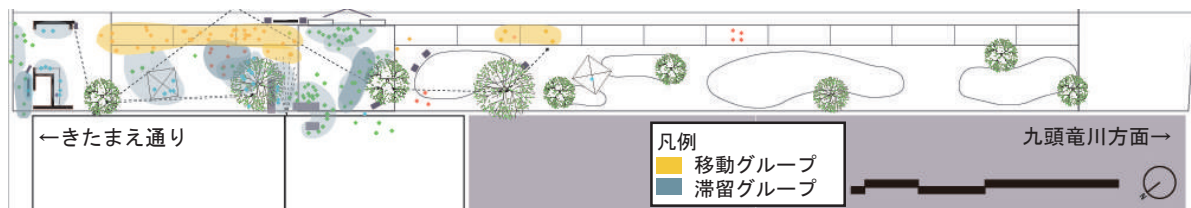
2-1. 企画内容、開催時間

三国祭が開催された2016年5月20日10:00-18:00頃に、マチノニワ内にて以下の企画を行った。

まちなか休憩処、ガーランドによる装飾とワークショップ、飲料品と雑貨販売、まちクイズの設置、研究発表

また、各企画を実現するために、椅子やテント、机、カラーマットといった移動可能な物品を公園内に配置した。

図2 マチノニワ全域の空間的利用プロット図



A social experiment on utilization possibility of vacant land, Mikuni, Sakai City, in MIKUNI Festival: Examination about Application of MIKUNI Festival in Tourism Community Development (Part.3)

MATSUDA Kishiko, KOYA Arisa, TANAKA Yudai, NAKAMURA Shingo, YABUKI Ken-ichi, NAKAJIMA Shin, and NISHIMURA Yukio

また、近い空間で類似する行動をとっていた来場者を1つのクラスターと考え、マチノニワでの行動についてクラスターごとの分析を行ったところ、計画意図と一致していた行動、想定外だった行動の2つに区分された。

意図と一致していた行動として、石畳での徒歩移動、中央部分での立ち止まり、手前芝生部分や門前での腰掛け、企画していたワークショップや展示への参加など4種類がみられた。

逆に、想定外だった行動からは、今後の活用方法についての示唆が得られると考えられる。うち1つは、芝生部分のカラーマットを子供連れの家族がベビースペースとして使用していたことである。ここからは、乳幼児～小児を休ませるスペースが三国祭にも求められていることが示唆される。もう1つは隣接建物とマチノニワの地面に段差があるのを利用し、段差に座り会話を楽しむ様子が見られたことであり、ここからは、細長い敷地に対し隣接建物をより開放的、一体的に使う提案が考えられる。

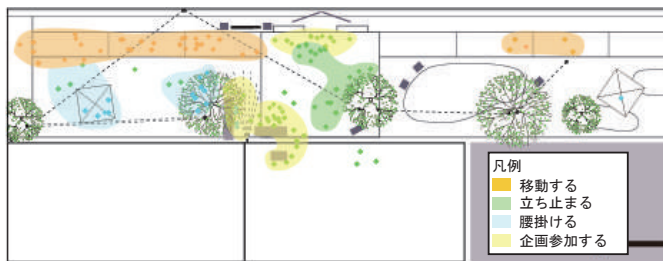


図3 意図と一致した行動プロット図

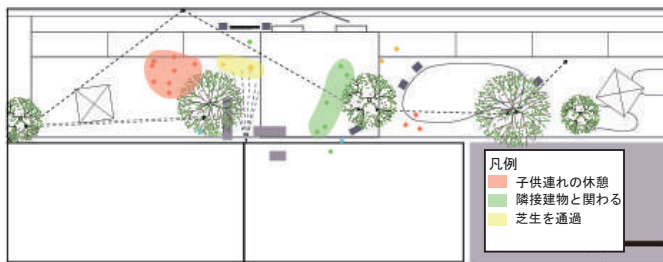


図4 想定外の行動プロット図

3-3. 今後の活用への知見と課題

イベント開催の際、マチノニワの特徴的な細長い形態と門構えには利点と欠点の双方が考えられる。

利点は、奥まで続いていることによる未知感や、装飾が門を通して一望できるといった心理的効果、装飾効果が非常に高いことがあげられる。また門と座席の存在によってきたまえ通り前面に滞留空間ができることも、移動中に座る場所の少ない三国祭では大きな価値を持つ。今回は九頭竜川側の空間の活用には至らなかったが、今回のように空間を限定して利用することも可能であるし、周辺敷地との関係性も考慮した動線設計やシーケンス性のあるイベントの設計も可能だと思われる。

だが、課題として門の視認性の低さが来場者の内部空間の見落としや中に入ることへの心理的抵抗感を生み出していることがあげられる。この改善のためには、門の開口部に調整可能な引き戸や折り畳み戸を導入することで、

企画内容、通行量、人々の公園内滞留量などに応じてサイズを変更することが可能になるといえる。

また、通常時においては、3-2.の空間的利用結果でも利用者の行動から示唆された通り、隣接建物との一体的な連携や、日常の交通動線のなかにマチノニワを位置づけられるように生活動線を一部変更することが活用の可能性となりうると考えられる。

4. まとめ

今回の調査は、三国祭に際して町家の敷地形状を有する空地をイベントスペースとして活用し、来場者の空間利用方法について実態調査を行うことにより、活用可能性への示唆を得ることを目的とした。

空間利用の全体的な傾向から、細長い敷地は門やガーランドといった装飾との相乗効果で来場者の興味を引くが、目的なしに細長い敷地の奥までが利用されることはないことがわかった。また、個々のクラスター的な空間利用のうち、予想外であった利用形態を通して、小児の休憩所といった、利用者の需要がありこの空間が寄与可能な活用方法が示唆された。

他方で、課題のひとつに運営面を挙げることができる。今回のイベントは大学が社会実験として参画したが、委託元である一般社団法人三国會所など、地域の有力な団体は三国祭の当日は多忙で運営ができない。しかし今後イベント等での住民の自主的な運営や、周辺との一体的なアセットマネジメントを目指すためには、イベントのみならず日常時からこの空間がなんらかの形で利用されマネジメントされている必要がある。そのための空間的対策には、細長い敷地形状を生かして、隣接建物をよりマチノニワ側に開放し一体的に連携することや生活動線を一部変更することを通し、公園が周辺住民に親しまれ、多主体が能動的に利用することが求められる。あるいは、持続的なイベント運営のために、ノウハウを安定して蓄積しながら主体間調整を行う組織が求められる。

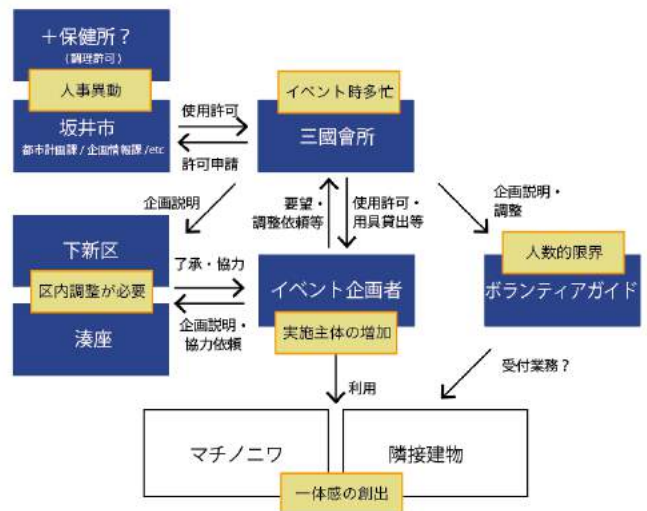


図5 マチノニワイベントにかかわる主体と課題

* 東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻 修士課程
 ** 東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻 博士課程
 *** 東京都市大学都市生活学部 講師
 **** 東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻 教授

* Master course, Dept. of Urban Engineering, Graduate school of Engineering, Univ. of Tokyo
 ** Doctor course, Dept. of Urban Engineering, Graduate school of Engineering, Univ. of Tokyo
 *** Lecturer, Faculty of Urban Life Studies, Tokyo City Univ.
 **** Professor, Dept. of Urban Engineering, Graduate school of Engineering, Univ. of Tokyo